Japanese Association for Religious Studies

よって多くが明らかになったことはもとより、時間・空間の概念、および神楽の類型に関する理論的な明晰さは、後学に資するところ非常に大きいと思われ、評者も大変勉強になった。最後に、霜月神楽というわが国にとって大切な芸能に対し、真摯かつ丁重に取り組まれたことに敬意を表し、小稿を終えることにしたい。

山里純一著

『呪符の文化史
――習俗に見る沖縄の精神文化――』

三弥井書店　二〇〇四年六月七日刊
A5判　三五〇＋iii頁　五八〇〇円＋税

小池淳一

はじめに

宗教的実践の表象としての呪符は、その存在は広く認知されてはいるものの、調査研究の対象として正面から取り上げられることは比較的少なかった。本稿は、呪術・呪法の実践の一つといえる呪符に注目して、その研究精度を向上させた山里純一氏の『呪符の文化史――習俗に見る沖縄の精神文化』（以下、本書とし、山里氏を著者とする）を取り上げ、内容の紹介と若干の検討を加えることを通じて呪術・呪法研究の課題を明らかにしていくことを目的としている。

ここでは最初に本書の構成及び成果を整理し、その上で呪符研究から導かれる呪術・呪法研究の課題について述べてみたい。

一　本書の構成

本書は先に『沖縄の魔除けとまじない』（第一書房、一九九七年）を刊行した著者が、その後に積み重ねてきた精力的な調査事例とそれに対する考察を新たにまとめたものである。最初に本書の構成を掲げよう（括弧内は初出時のタイトルと初出年）。

「序」で前著との関わりが述べられ、本書の内容が要約されている。続く第Ⅰ部「呪符木簡と沖縄のフーフダ」は、第一章「日本の呪符木簡」（新稿）、第二章「沖縄のフーフダ」（『沖縄の魔除けとまじない』第一章二節、一九九七年）、第三章「急急如律令」の呪句（「『唵急如律令』考」、一九九九年）から構成されている。沖縄の事例を中心とするものの、広く呪符とそこに記された字句、記号等についての考察が行われている。

第Ⅱ部「「墓中符」・石敢當」は沖縄独自とも思われる呪符の展開が扱われる。第一章「「墓中符」」（「沖縄の『墓中符』」、二〇〇一年）、第二章「石敢當」（「石敢當覚書」、二〇〇三年）、第三章「沖縄の石製呪符」（同、二〇〇四年）から成る。

第Ⅲ部「習俗と呪符」は第一章「沖縄の習俗と呪符」（新稿）、第二章「胞衣と呪符」（「胞衣について」、一九九七年）、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

第三章「ウティンジカビ」（「ウティンジカビについて」、二〇〇一年）の三つの論考が集められており、生活習俗と呪符との関わり、実際の様相が対象化されている。

第Ⅳ部「資料「呪符集」」は離島における呪符関連の資料が提示されている。第一章が、「多良間島の「玉黄記」」（「多良間の『玉黄記』について」、二〇〇〇年）、第二章は「久米島に伝わる呪符資料（「久米島に伝わる呪符の諸相」、一九九九年、「上江洲家に伝わる呪符関係資料」、二〇〇二年）、そして第三章には「与那国島に伝わる呪符資料」（新稿）が配されている。

以上の構成と初出年次からわかるように、本書は沖縄における呪符及び関連する事象を歴史的に定位し（第Ⅰ部）、その範囲を広げ（第Ⅱ部）、習俗のなかにも見いだす（第Ⅲ部）、という流れで叙述されている。これらは比較的短期間に精力的に進められた研究であり、その豊かな内容は瞠目に値するものといえよう。また第Ⅳ部に収められた呪符集は、離島において偶然に遺された貴重な資料であり、豊富な経験を持つ著者によって紹介されることによって、沖縄における呪符の広がりをうかがわせるものとなっている。旧稿には本書収録にあたって改訂が行われており、呪符研究の現段階を知るには格好の書として整えられているといえよう。

二　本書の達成

内容をさらに詳しく見ていこう。本書は呪符を「悩みや苦しみをもたらす悪霊や悪鬼を除去し、願望を叶え幸福を招くと信じられている、図形・絵・文字などが書かれたもの」（七頁）と定義し、「その素材は木、竹、紙、石、瓶などがあるが、木製の呪符を一般に呪符木簡と称している」（同頁）とする。そうした認識に基づいて第Ⅰ部第一章では、呪符木簡の起源・形状・使用法・記述内容について大まかに確認している。これは、第二章でとりあげる沖縄におけるフーフダ（符札）をその系譜に位置づけ、呪符木簡の現用例（二六頁）として取り上げるための準備である。第二章では沖縄におけるフーフダの様相について、①用いられる場所（家・屋敷、便所、畜舎、墓）ごとにまとめ、②寺社及び民間で作製される場合があること（特に、臨済宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、天台系修験本宗の呪句を明らかにしている）を整理している。さらに③琉球王国期の呪符木簡の出土例と記録も指摘し、民間に広がったのは大正期以降か、としている（四九頁）。

呪符が記された札が現代沖縄に実際に、数多く用いられていることを見いだし、さらに呪符木簡の末裔として位置づけて、呪符が用いられる空間と呪句を操る宗教的な存在をほぼ明らかにしたことは、現代における呪術のひとつのありようとして極めて重要な問題を提起している。

なお、第三章では「急急如律令」という文言を取り上げて、その中国・朝鮮・日本における用例を紹介した上で、唸という文字が中世以降、修験道において創出されたとする（五九―六〇頁）。さらに沖縄の様相を述べ、日本の呪符が流布したと考察している（六四頁）。

第Ⅱ部は沖縄における呪符に類するものとして墓中符（第一章）、石敢當（第二章）、その他の石製呪符（第三章）を取り上

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

げている。墓中符については道教系、仏教系に分け、さらに現代における様相について述べている。石敢當については沖縄における起源説話に注意しながら（一〇二―一〇六頁）も、本来は石の呪力に基づくとし（一二五頁）、中国からの伝播、各地の実例、さらに特異な事例の紹介をおこなっている。中国における信仰対象とは異なり、辟邪物としての機能を選択的に受容し、特異な文字や記号も並記するようになっていることを指摘している（一二五―一二六頁）。これは第三章における、石製呪符の造立にあたっての三世相、シュムチといった宗教者の関与の指摘（一三六頁）とともに沖縄における呪符の変容と生成に関する着実な史資料に基づく見解であり、呪符の実践とその沖縄的様相に関する宗教者的な存在に対する視点の必要性が提起されていると受けとめることができる。

こうした沖縄における呪符の展開の背景として重要と考えられる習俗との関わりについては第Ⅲ部で論じられている。第一章では五月五日のハブ除け、九月九日のウマーチの御願、火災除け、棟札・棟木における呪句、を取り上げている。いずれも筆者の実地踏査に基づく提示であり、呪符の生きている沖縄民俗文化の様相を具体的に知ることができる。第二章は産育儀礼における呪符の使用例として、胞衣の処理の問題を取り上げている。民俗、歴史双方における胞衣研究の成果を通覧したのち、沖縄における事例を述べているが、特に胞衣を処理する方角に関する離島の史料、胞衣が下りない時のまじないの一部としての呪符が紹介されている。第三章では沖縄で先祖供養の際に用いられる特殊な紙であるウティンジカビに注目する。こうした紙には地蔵菩薩らしき画像が載せられており、一九五〇年代に糸満の寺院で考案され、那覇の茶舗が作製するようになり（二〇六―二〇九頁）、一九六〇年代以降に需要が増えていったことが述べられている。

最後の第Ⅳ部は離島における呪符が記された記録類を具体的に取り上げて提示してくれている。宮古島と石垣島との中間に位置する多良間島の仲本家（現在は宮古島平良市に伝存）の「玉黄記」（二七丁）、沖縄本島の西にある久米島の上江洲家、與世永家、吉浜家文書における呪符関係の記述、日本最西端の与那国島の西銘家文書のなかの冊状の史料が、紹介されている。これらは、ほとんどが著者によってはじめて紹介されたものであり、なかでも「玉黄記」はユタの関与により、披見が難しかった（二頁）ものを提示したものであり、沖縄における呪符の記録としては重要なものといえる。これらがいずれも多良間島の三世相（二四六頁）、久米島の地頭代（二四七、二五三頁）及びその分家（二六一頁）、蔵元の役人の家（二六六頁）といった識字層に伝来し、刊本の写本ではなく、何らかの意図のもとに呪符や呪文を集成記録したものである点も重要であろう。本書では、相互の関連、共通する呪符について注意されていて断片的な情報を少しでも体系づけようとする意図が感じられる。

総じて、本書は近年の筆者の呪符関連の資料紹介、習俗との関わり、日本本土、中国との比較を試みた意欲的な著作ということができる。特に呪符集やフーフダの実例等に関して具体的な資料提示に多くの頁が割かれている点は極めて有益で、今後

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の調査研究に資するところが大きい。沖縄地方にこれだけの史資料が存在し、現在でも展開していることが提示されたことは、日本列島全体の呪術・呪法を考えていく上でも絶えず参照していくべき業績といえる。さらに道教をはじめとする中国文化の影響と変容という呪術・呪法研究におけるひとつの視点を、事例の集約と関連史料の指摘とともに提示してくれていることも方法的な達成として高く評価されるべきものと考える。

また索引が付せられている点も周到な本造りということができる。こうした多様な様相を呈する研究対象を取り上げるにあたっては、索引を整えておくことによって著者の意図や見解とは異なった文脈からの検索を可能にする。そうしておくことで、今後の研究の展開に大きく資することになると考えられる。

三　本書の問題点と呪術研究の課題

本書は以上みてきたように多くの達成と新知見に富む優れた呪符研究の業績であるが、いささかの問題点もないわけではない。特に、沖縄以外の、また習俗次元の呪術・呪法研究からの視点で検討するといくつかの問題点が指摘できる。

第一に第Ⅳ部に収載され、また全体の叙述を通しての基礎資料ともなっているであろう呪符集の紹介についてであるが、必ずしも書誌的な情報が充分に示されておらず、関連するであろう所蔵先の蔵書内容等を知ることができない。この点では書物史に関連する方向での進展が困難であることになり、いささか物足りない。これは呪符集が伝存した地域社会における呪符の実態との比較も難しくしている。特に呪符は影印も併せて提示することが現段階では必要であると考える。

第二に一九三頁等で、沖縄の呪符類は日本系（対立概念は中国系か）のものが伝わっている、という分析の視点や結論が提示されているが、呪符や呪句、あるいはそれらに伴う記号が道教や中国の民間信仰起源であった場合は、単純に区別がつくものとは思われない。これは不充分な系統概念ではないか、という疑念が生じる。道教的な要素が日本列島全体の民俗のなかでどのように展開しているか、今後は注意していく必要があるだろう。

第三として、宗教者、易者（三世相）、ユタなどの介在が随所で指摘されているが、それらは、推測や伝聞にとどまっており、実際の使用場面の参与観察や指示者への調査は行われていないようである。呪符をめぐる知識の実践や動態をとらえることは、その展開や変化を見通していくためにも必要ではないだろうか。

最後に本書のテーマである呪符という視点は、副題「習俗に見る沖縄の精神文化」にも示されているように、やはり沖縄社会の特殊性に依拠していると考えられる。日本列島全体では、時代が下るにつれて増える呪符木簡そのものの分析や関連する記録の集成などをふまえて、呪符を構成する要素（呪句、記号、文様等）の系譜の解明や他の宗教現象と比較が必要であり、また可能であろう。さらに種々のまじないの様態を資料そのもの以外にも言説や評価とともにとらえることも不可能ではない。こうした点は本書を出発点として検討を深めていかねば

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ならないだろう。

なお、ここでは細部にわたるのでふれないが、雑誌論文の注記が掲載誌の号数のみを記し、発行年を記さないのはいささか不親切であるし、全体にわたって誤植も散見される。また、一八五頁に記されている国頭村の胞衣笑いの事例は島袋源七の『山原の土俗』（一九二九年）が初出であろう（この書は他の箇所では引用されている。八六頁等）が、注記では明らかではない。こうした点は残念である。

おわりに――呪術・呪法研究の方向性

なお、本書刊行後に東アジアにおける呪物を広く多角的にとらえた大形徹・坂出祥伸・頼富本宏編『道教的密教的壁邪呪物の調査・研究』（ビイング・ネット・プレス、二〇〇五年）が刊行された。本書の著者である山里氏も執筆されていて、ここで述べてきた研究の状況はさらに前進している。そうした研究の機運が高まりつつあることも踏まえて最後に呪術・呪法研究の課題について評者なりの展望を述べておきたい。

呪術・呪法を広義の歴史研究のなかに位置づけようとするとき、まじないの具体的な様相を、身体の使い方や儀礼のコンテクスト、あるいは地域や集団、階層における宗教体系のなかで位置づけていく視点が必要であろう。またまじないに用いられるモノ（素材、道具等）の視点、説話的な解説や呪法書等のメディア（媒体）への注意も求められる。

木簡や出土文字、墨書土器といった古代史における資料の増大及び分析の深化的な視点と近世近現代における民俗的なデータの蓄積とを中世期の史資料の発掘や解析、共有化によってつなぎ、その上で一定の通史的な様相を提示していく（呪術史）ことを目標として意識しつつ研究を進めることを提言したい。そして、その前提及び基底として、考古資料や古代史における実例、中世における史資料の発掘と定位、近世における呪法書の版行と書写の検討、民俗事例の整理、呪術観の対象化等が求められるであろう（呪術誌）。

これらの課題はもちろん、著者一人に期待するのではなく、呪術研究全体の課題として捉え、考えていく必要があるだろう。著者が本書を通して、呪符の世界の奥深さ、錯綜した様相に光をあて、整理が試みられたことに敬意を表しつつ、若干のコメントを記した所以でもある。

（本稿は科学研究費基盤研究「呪術・呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究」の成果を一部含んでいることを付記する。）

NII-Electronic Library Service